

母のお弁当

小さな丸、ごつごつした大きな丸、いびつな三角、平たい俵型…これらは母の握ってくれたおにぎり。どれも不格好だけれど、愛おしい形だ。

親元を離れてから数十年、北海道の実家に帰省してから自宅に戻る朝は、決まって母が作ってくれるお弁当を朝一番の便に乗って機内で広げるのが毎度の愉しみだった。手渡されるのは、たくさんのおにぎりとおかずには、ニラを入れた卵焼き、鶏肉か塩鮭、揚げ物、根菜のきんぴら、青物の胡麻和え、自家製の漬物など、普通ながら何よりもホッとするいつもの母の味、穏やかで優しい母そのものだ。食べ終わると、さあ、また自分の居場所に戻って頑張ろう！と背中を押してくれた。

食いしん坊、料理上手なその腕で7人家族を養ってきてくれた母の作るおにぎりの具は、それなりにこだわりがあった。北海道石狩川を遡ってきた秋味(鮭)は程よく脂がのっていて香ばしく焼けている、さっと焼いて卵が弾けた寿都産のたらこ、毎年自ら漬ける梅干し、鰹節と煎りごまに醤油と一番搾りのごま油をたらして混ぜたもの、だしを取った後の昆布で作った塩昆布、山で採ったハスカップの実の塩漬。最後に遠火で炙って青く光る海苔で包む。どれをとっても母なりに一工夫こらしてあるものばかり。

ある年の暮れ、里帰りをして毎年のごとく母と一緒におせち料理の準備をしていた時のこと。手を動かしながら、ふと振り返ると母は今仕込みをしたばかりのものをまた最初から作るようしていた。驚き呆然としながら、これはおかしい、まさか、いや、ただの勘違いかもしれない。でも、もしやと思うとその日から眠れない日々が続いた。正月が明けた頃、母をなんとか説得しながら病院に連れて行くと、脳が少しずつ萎縮していて認知症が始まっている事がわかった。それから、母の症状は次第に進みながらも、なんとか家事をこなしながら暮らしていた。

2年ほど時が経ち、出発の朝には必ず早起きしてお弁当の準備をしてくれていた母は、その頃にはもう起きてこなくなっていた。眠れなかつたり、寝すぎたり、今が何時なのか、昼なのか夜なのか、どんどん時間の観念が無くなっていくようだった。仕度をしていくところに、「起こしてくればよかったしょ」と言いながら母が申し訳なさそうに寝巻のまままで台所に入ってきた。私が発つことを気にかけてくれたのだと思うと嬉しかった。そして、母はおにぎりを握り始めた。もうおかずを作る余裕はなく、とにかくおにぎりを作ることが母にできる精一杯のことだったはず。頭はおぼつかなくなっても、長年やってきた動作を手が覚えているのだ。炊きあがった温かい米をのせている母のふくよかな掌を眺めながら、いったい母は、この手でこれまで家族の為にどれほどの数のおにぎりを握ってくれた事だろうと思った。

いつもの様に慌ただしく出掛けて、機内でおにぎりを一口ほお張った途端に鼻先がツン。堪えていたものが堰を切ったように溢れてきて、頬を伝った涙でおにぎりがびしょびしょになってしまった。ひとしきり泣いてから、涙が乾いてくると気持ちも落ち着き始め、どんなに悲しくて切なくても、これが現実、さあ食べよう、という気になってきた。

いびつな形のおにぎり達は、具がはみ出しているもの、全く入っていないもの、塩を振り過ぎてしょっぱいもの、逆に塩をかけ忘れて味気がないものと様々だけれど、これも、これも、これも美味しいと、ひとつひとつのおにぎりをゆっくりと味わった。母の手の温もりが伝わってきてまた涙がこぼれた。

私は、これほど愛おしくて心のこもった食べ物を他に知らない。そして、これが母の作ってくれた最後のお弁当になった。